

イマジネーションのチカラ

美術学科 教授
野崎 眞澄

今年の挿画チームのコース構成は、デザインが四名、日本画が二名、油画が一名です。美術学科の三つのコースの学生が、挿画を担当するようになって三年になりますが、今年の特徴は、デジタルで描かれた絵が過半数を占めているということでしょう。画材は違っても、描かれたモチーフやそれぞれの文章に寄せる思いに違いはありません。小説の世界と挿画の想像力がひとつになって、読む人の心に届く作品になるのです。その意味で挿画とは、作家が言葉で説明していない文章の行間を、イマジネーションのチカラで埋めていく作業と言えるでしょう。文章に寄り添いながら、小説の世界の背後にある温度や空気のようなものを、感じ取って描くことが大切なのです。

このことを踏まえてあらためて今号を見てみると、どの挿画も小説のテーマを魅力的に描いた絵になっていると思います。地図を頼りにお話の舞台となった場所を散策してみれば、思いがけず尾道のあらたな魅力を発見できるかもしれません。

『尾道草紙』と誌面づくり。

美術学科 教授
世永 逸彦

私の研究室では、三名の学生が、表紙と誌面を中心にデザインを担当させていただいています。テキストを創作する学生と、イラストレーションを仕上げる学生、この二つは誰にでも解りやすいところでしょう。それに加えて、編集デザインの役割とはなんでしょう？ それは、主役のテキストを読みやすく文字組みし、それらに添えられるイラストレーションとテキストとの関係性を見つけだし、誌面づくりや外観のイメージ（＝表紙や題字）を、『尾道草紙』という生きた媒体の姿に導く役割といえます。

建築の世界に例えると、展示空間である美術館・博物館、あるいはギャラリーなどの建物を設計する役割に近いかも知れません。展示物や美術品そのものには特に介在しないで、その魅力を最大限に引き出せる様に、必要とされる展示空間を構築する役割……。

この機会に、編集デザインの世界にも注目していただけただけなら幸いです。